

## 平成 22 年度 海外渡航旅費助成金成果報告書

名古屋大学大学院 環境学研究科 地球環境科学専攻  
修士課程 2 年 毛利拓治

日本地震学会による平成 22 年度海外渡航旅費助成を受け、2010 年 12 月 13 日～17 日に San Francisco の Moscone Convention Center で行われた American Geophysical Union の Fall Meeting に参加してきましたので、その成果を報告いたします。

初めての海外渡航にも関わらず浮かれた気分もほとんどなく、道中私は空いた時間を見つけては独りブツブツ言いながら発表の練習をひたすら繰り返していました。私のポスター発表が学会初日の午前ということもありましたが、何もかもが初めて尽くしということに対し、不安を感じていました。さらに発表当日、ポスター会場に着くとそこには無数のパネルが整然と並んでおり、私はその膨大さにおののくと同時に、その中の一つにすぎない自分の発表がとても小さいもののように感じられました。

そんな、荒れ狂う海に向け小舟一つで漕ぎだすような心情の中、コアタイムは始まりました。私の発表は“Characteristics of the autocorrelation function decay rate of ambient noise”というタイトルで、伊豆大島で観測された常時微動記録を用い、その自己相関関数の時間減衰の特徴を調べ、明らかにするという内容でした。予想以上に多くの方が興味を持って訪れて下さったことは嬉しかったです。そして多くの方が私のぎこちない英語を汲んで下さったおかげで、何とか自分の用意した発表内容は伝えることができましたと思います。しかし、相手の質問に対して十分満足のいく答えを返すことができない部分もあり、自分の英語力不足を感じずにはいられませんでした。一方で、私の研究は島内の観測点の全体的な特徴を調べたものでしたが、議論を通し、もっとミクロな視点も持ってみてはどうかなどの貴重なアドバイスもいただくことができました。

コアタイム中、熱心に聞いてくれた北京大学の学生がいました。納得するまで何度も質問をしてくれました。その食欲さを自分も見習わなければなりません。何度もやり取りをし、また言葉として上手く伝わらない場合は、図をメモ用紙に描くなどしてお互いに考えていることを擦り合わせ、最終的には納得してもらうことができました。議論が終わり、名前を尋ねると 4 日目に発表するから良かったら聞きに来てと誘ってくれ、最後に握手を交わしました。そして 4 日目、彼の発表を聞きに行くと、彼はチベット地方において、常時微動記録の相互相関解析から得られるレイリー波を用いたトモグラフィの研究をしていました。彼に限らず、その日のポスターセッションには常時微動記録を用いたトモグラフィの研究をされている方が意外に多く、世界の研究のトレンドを知りました。

さて、私がパネルに自分のポスターを貼っている時、隣に論文等で何度も目にしたことのあるあの Campillo 氏が現れました。その時、彼に直接会うことができたことに私は感動したのですが、その後彼の発表を目の当たりにし、さらに感嘆しました。彼はセッション中、ポスターにほとんど背を向けて立ち、多くの聴衆に届くよう広く語るように発表していました。私は、聴衆に向き合い、多くの人に伝えるという意識をそこに感じ、プレゼンターとしての心構えを学びました。

私は今回の AGU の Fall Meeting への参加を通し、研究者や発表者としての姿勢を少しばかりかもしませんが、学ぶことができたように思います。そして、この経験を今後の仕事及び英語修得に大きく役立てていきたいと思えます。最後になりましたが、このような大変貴重な機会の助成をして下さった日本地震学会及び関係者の皆様にお礼申し上げます。ありがとうございました。